

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第51回 妻の闘病を振り返って思うこと—がん治療の地域格差①

2010年3月、4年 養に入ろうとしていた。10カ月の闘病を終え、妻は天国へ召された。私は大阪でがんの摘出手術を終え、これから自宅療

セカンドオピニオンで異なる治療方針

に参加していた。1週間後後地区センターで胸部レントゲン検査の結果、精密検査が必要だった。早速地元益田赤十字病院を受診し、「肺線断を受け、翌週肺の部分摘出手術に踏み切った。経過は良好。経口抗がん剤UFTを処方され、経過観察しながら抗がん剤をI種投与していくこととなった。妻からは全面的に今後の治療方針を任されていたから責任重大だった。

数カ月を過ぎたある日、読売新聞紙上に全国初の薬物療法専門医13名の発表記事を見つけた。その内2名が広島在住の医師だった。地元主治医の了解を取り、早速広島G病院D医師のもとに1週間後セカンドオピニオンとして訪ねた。

D医師は遠方から来た私たちを快く迎えてくれた。資料を綿密にチェックした上でこれから「すぐPET/CTを受けませんか」といわれた。PET/CTは事前に申し込みをして数週間後、改めて来院するのが普通。その結果を明日持参して欲しいという。

G病院に設備が無かったので、T病院に連絡して頂き、PET/CTを受けた。その夜広島に泊り、翌朝検査結果をもってD医師を訪問した。結果は幸いにして益田赤十字病院とほぼ同じだった。D医師の誠意を感じた。念のため、今後の治療方法について伺うとI種混合の抗がん剤投与が望ましいと言われた。益田赤十字病院の治療方針とは違う。広島まで来た意味がここにあった。

さあ主治医はなんと言うだろう。「私には出来ない」と言う返事も考えられる。場合によっては病院を変えることになるからだ。田舎だから近くに他の病院は無く、40キロ以上離れた他の地域に行くことを覚悟せざるを得なかった。話を切りだした際の主治医の驚いた顔は今でも覚えている。そして抗がん剤の恐ろしさを知ることとなる。